

愛國百人一首について（坤）

土屋 博

（関連圖書一覧のついで）

八「國魂 愛國百人一首の解説」西内雅著

（錦正社、昭和六十年刊、定價二千圓、二三〇頁）

著者は一九〇三年生れ、陸軍士官學校卒。はしがきに曰く、「本書は愛國百人一首の解説として三つの柱を立て、神代から江戸幕末までの歴史、この歌集の詠歌者百人の人物傳、その百人の詠歌した歌詞の眞意の三者に籠つてゐる日本の國魂くにたまを畫きたるものなり」と。

九 復刻「愛國百人一首」川田順著

（河出書房新社、平成十七年刊、定價千八百圓＋税、一九〇頁）

戦後六〇周年祈念復刊企畫と銘打ちたり。昭和十六年川田順私家版の方の復刻なり。川田版「愛國百人一首」には明治時代まで含む特色あり。

十青空文庫「愛國百人一首評釋」齋藤茂吉著

インターネットにても讀むことを得。（九首のみ）

https://www.azora.gr.jp/cards/001059/files/46880_40531.html

（以下、参考圖書）

十一「國歌講本」浅井洌・村松清陰合編

（光風館、明治三十五年刊、定價金參拾錢、六二頁）

はしがきに曰く、「歌は人の心情を述べ思ひ邪なき誠をあらはすものなり。されば常にこれを諷詠すれば人の徳性を涵養する力少なからず。ここをもて中等教育にも國歌を加へられたいども、未だ其の教科書として編纂せられしものを見ず」と。

柿本人麿「ひむがしのぬにかぎろひのたつみえてかへりみすればつきかたぶきぬ」より孝明天皇「戈とりて守れ武士九重のみはしのさくらかぜそよぐなり」まで。

十二「國民歌集」東京帝國大學文科大學講師佐佐木信綱選

（民友社、明治四十二年刊、定價金壹圓、本文二四八頁）

扉には「爲同志社學生校友之一人」の朱印押さる。はしがきに曰く、「こたびひろく諸書を涉獵して忠君愛國の情をうたへるものを主とし、父子夫婦兄弟朋友の愛をうたへる歌、意調雄健なる歌、立志訓誡の意を含める歌をもまじへて、神武の帝の御代よりはじめ、近き頃に至るまで、凡そ六百六十首を選び出でつるもの、やがてこの國民歌集とぞなれりける」と。

神武天皇「神風の伊勢の海の大石にや・・・」より福羽美靜「國のため思ひかためしわが心玉とみがきて世を照らさばや」まで。

十三「日本偉人百首通解」

（大阪毎日新聞、大正二年刊、正價金拾八錢、一二八頁）

題字は、東郷海軍大将の「萬古清風」なり。こは明治三十九年海軍記念日、大阪毎日新聞祈念號への揮毫なり。刊行の辭に曰く、「大阪毎日新聞は、茲に大正三年の新年を迎ふるにつき、一般家庭教化に資せん趣旨にて、特に日本歴史中より然るべき人物一百人の歌を新撰し、「偉人百首」の歌留多として、廣く讀者に頒つこととなつた。その撰者は國文家池邊藤園氏、兼ねて揮毫せられ、人物畫は斯道の大家小堀柄音氏を煩し、歌と人物と兩ながらその趣旨を充したることゝ信ぜらる」と。素戔嗚尊「八雲立つ出雲八重垣妻こみに八重垣つくるそのやへがきを」より、乃木希典の「うつしよを神さりましたし大君のみあとしたひて我はゆくなり」まで。

十四「明治百人一首」末吉勘四郎編

(大正四年刊、非賣品)

「賜天覽」の朱印あり。明治天皇「あし原の國とまさむと思ふにも青人草ぞ寶なりける」など。

十五「新譯日本秀歌選」文學博士物集高見選、文學士物集高量譯

(嵩山房、大正五年刊、定價八拾五錢、三二九頁)

小野小町「思ひつ、寝ればや人の見えつらん夢と知りせば覺めざらましを」について、眞淵の評は「かく敢果なげに詠めるをよく味ひて歌の心を知るべし」、貫之の評は「哀れなるやうにて強からず、言はばよき女のなやめる所あるに似たり」と。

十六「歷代秀吟百首」川田順著

(三省堂、昭和十四年刊、定價壹圓貳拾錢、一六六頁)

昭和十三年十月號「短歌研究」にて自ら選定したる秀吟百首に新たに評釋を附したるもの。

天武天皇「吾が里に大雪ふれり大原の古りにし郷にふらまくは後」より野村望東尼「ひとたびは野分の風の拂はずは清くはならじ秋の大空」まで。

十七「愛國詩文二千六百年」高須芳次郎著

(非凡閣、昭和十七年刊、定價貳圓、三九六頁)

日本武尊の「國思歌」(大和は國のまほろば……)より佐藤惣之助の「燃ゆる大空」まで。

十八「幕末愛國歌」川田順著

(第一書房、昭和十七年増補改訂版、定價貳圓、四四二頁)

目次は、序篇(國學者と歌人、寛政三奇士)、幕末愛國歌珠玉選、主要作者篇(傑出せる十二名、吉田松陰より三條實美まで)、一般作者篇(藤田幽谷より近衛忠熙まで)、外篇(幕末愛國歌總論)より成る。

十九「愛國詩歌」井上萬壽藏著

(文博研化研究社、昭和十九年一月刊、定價金參圓十特別行爲税相當額貳拾錢、本文二六七頁)

著者は鐵道省國際觀光局書記官等を務めたる人物なり。序に曰く、「日本人、とりわけその青年層の愛國心を振るひ起こすやすがとしてこの書を送る……ここに愛國の詩歌を高ら

かに繰り返し口ずさむことを提唱したい」と。

元明天皇「ますらをの鞆の音すなりものふの大おほまへつきみみたて臣楯立つらしも」より與謝野寛「身の
ために身はいたはず我もまた召さば尊き君の御楯ぞ」まで。

(令和三年二月二十日受附)